

生者と死者を繋ぐ万世一系



渡辺 利夫

拓殖大学学事顧問

現世に生きる者が生者であ

る。生者を生み育んだものほとんどが死者である。私の祖父母も父母もとうに死んでいる。生者は死者があつて初めて生者なのだ。そして生者は間もなく死者の仲間に入っていく。

生者の一人一人は「個人」(Individual)と呼ばれる。神や社会に対する究極的な存在として、もうこれ以上は細分化(divide)できない唯一の存在が個人だと考えられている。わが国の憲法でも「すべて国民は、個人として尊重される」とある。「婚姻は、両性の合意のみに基いて成

立」とも記される。夫婦は独立した個人の結びつきであり、共同体の基層をなす家族の形成主体だとは観念されていない。

その上、個人の自由や権利は国家の権力に優越するといふわが国固有の「立憲主義」なる思想が、アカデミズムやジャーナリズムを闊歩している。

現世を構成しているものが生者だけだという思想は、無数の死者たちが織り紡いできた歴史と伝統を軽視する風潮となつてあらわれ、川面を漂う木の葉のような不安定な社会へと日本を誘う。伝統から

解放されて自由を与えられた個人が、寄る辺のない不安と孤立と無力感に苛まれ、ついには自由を放棄して権威主義へと逃げ込む人間性の背理は、新フロイト派のエーリッヒ・フロムによつてつとに鋭く分析されている。

現世を構成しているものが生者だけだというのは、錯誤の思想である。逆説と諧謔をもつてこのことを語つたのは、英国の思想家ギルバート・チェスタトンである。主張はまことにラジカルである。ラジカルの原義は「根源的」である。

「単にたまたま今生きて動

いているというだけで、今の人間が投票権を独占するなどということは、生者の傲慢な寡頭政治以外の何物でもない。伝統はこれに屈服することを許さない。あらゆる民主主義者は、いかなる人間とい

えども単に出生の偶然によつて権利を奪われてはならぬと主張する。伝統は、いかなる人間といえども死の偶然によつて権利を奪われてはならぬと主張する。『われわれは死者を会議に招かねばならぬ』(『正統とは何か』安西徹雄訳)

チェスタトンは伝統とは過去の平凡な人間共通の興

論」であり、民主主義とは「あらゆる階級のうちもつとも陽の目を見ぬ階級、われらが祖先に投票権を与えること」と、つまりは「死者の民主主義」だという。

氏の「現世中心主義」への嫌悪は、いかにも徹底的である。幾世代にもわたり「民草」が共通に感じ、共通に考

えてきたことが伝統であり、死者の発する声に耳を傾けて現世の政治的決定がなされねばならない、と氏は主張する。

同一の国土の中で、ほとんど同種の人々が、他国では使われることのない「孤立的言語」の日本語を用いて共同体と国家を編み、宗教上の争いが社会に亀裂を生じさせることもなかった、そういう「海洋の共同体」が日本である。

天皇の万世一系とは、動乱や侵略によって深刻な危機の淵に立たされることなく、歴史が連続として紡がれてきたことを証す血脈の物語である。

新元号令和の時代が開かれた。明治以来、一世一元の制が敷かれ、歴史が瞬時たりとも途切れることなく受け継がれることが顕示されるにいたつた。限りある個々の民草の人生がはるかなる血脈の中を流れ流れて今生きてある、そういう連続性の感覚を天皇家の血脈の連続性の上に投影できる。

私どもの有限の人生を永遠なるものとして再確認しながら、現世の中に伝統をつねに再生させる、そういう生き方を、改元のこの機に立つて深く心したい。

「過去の平凡な人間共通の興

論」であり、民主主義とは「あらゆる階級のうちもつとも陽の目を見ぬ階級、われらが祖先に投票権を与えること」と、つまりは「死者の民主主義」だという。